

# 筑前国志賀の白水郎歌十首と志賀島

恒 松 侃

世界各地に沈鐘伝説がある。海底または湖底深く鐘が沈んで、引き揚げる事が出来ないという伝説である。日本において有名な一二をここで取り上げる。

福岡県敦賀市北東に、金ヶ崎と称する標高八六mの小高い山がある。日本海に突き出た岬のような地形で、山の中間には金ヶ崎城址があり、山麓の金前寺こんぜんじには松尾芭蕉の句碑が建立されている。「月いづく鐘は沈める海の底」の句碑である。資料1。

この小さな山は歴史的には名高く、南北朝時代新田義貞はこの山に立て籠って足利尊氏軍と戦って敗れ、陣鐘を海底に沈めて逃げたという。後に住民が鐘を引き揚げようとしたが、鐘は逆さに沈み竜頭が海底に突き刺さって引き揚げることが出来ず、奥の細道旅行の時に宿泊した敦賀の宿の主人からその伝説を聞いた芭蕉は、「中秋の夜は敦賀

に泊まりて雨降りければ」と前書きして、前掲の句を吟じた。この句は奥の細道には収録されていないが、荊口句帖・真蹟短冊に収録されている。敦賀において八月十五夜の明月を觀賞しようと期待したものの、雨で觀賞出来なかつた寂しさと、沈鐘伝説に纏わる哀しさとがあいまって情感が漂い、静かに句碑が佇んでいる。

標高八六mの金ヶ崎は、陸続きに敦賀の街から登った場合はなだらかな坂道で、行楽地にも相応しい山であるが、日本海側から眺めると断崖絶壁の荒々しい岬で、特に真冬は日本海の風波を真面に受けて、陣鐘引き揚げが如何に困難な作業であったかを思わせる。

永遠に引き揚げる事の出来ない沈鐘伝説は各地に存在し、敦賀市金ヶ崎の沈鐘が事実であるかどうかは不明であるが、新田義貞の悲劇によって生まれた伝説であろう。

日本海の荒波に洗われている金ヶ崎岬は、当然船舶の遭難も多く発生したであろうし、金ヶ崎と称する地名は鐘ヶ崎と表記する地名もあって、金と鐘は海岸線の最も恐ろしい地形を表現する用語であった。金と鐘は類聚名義抄等には同訓として取り上げられており、カネは更に曲の文字もあり、この文字の場合曲尺・曲差等直角に曲った事を意味し、この文字を地形に当てると、陸地が鋭く曲った場所を表現するようになったのではなからうか。陸地が鋭く曲った海岸は波が荒く、潮流が激しく、その上暗礁も多くて、金と鐘、更に曲の同訓から発生したと思われる金ヶ崎の地名は、その荒々しい表現から沈鐘伝説が発生したかもしれない。

次に万葉集巻第七<sup>1230</sup>番歌に「ちはやぶる金の岬を過ぎぬとも我は忘れじ志賀の皇神」(恐ろしい神霊の宿る金の岬を無事に通り過ぎる事が出来ても、私達は決して忘れる事は致しません。志賀の皇神の事を)とあって、この金の岬は福岡県宗像郡玄海町鐘崎の事であり、玄界灘に直面している。この金の岬も強風・荒波・暗礁があり、多くの船舶が沈み、人命も多く失われていたらしい<sup>資料2</sup>。

江戸時代の儒学者貝原益軒の筑前国続風土記には、昔三韓から大きな韓鐘を船に載せて来たところ、この金の岬で風浪が起こつて、鐘は海に沈んでしまった。それは竜神が鐘が大好きで、風浪はこの鐘を奪う為だったとある。筑前

国続風土記のこの記事は、勿論沈鐘伝説である。

水中から引き揚げる事の出来なかった沈鐘伝説が存在するという事は、同時に引き揚げられた沈鐘伝説も存在するという事にならないか。近江八景三井の晩鐘で有名な園城寺の梵鐘は、依藤太秀郷が三上山の百足退治を行つて、そのお礼に琵琶湖中の竜王から贈られたものであるとされ、依藤太秀郷はそれを園城寺(三井寺)に寄進したと伝えられているが、表現を変えればその鐘は、琵琶湖中から引き揚げられた梵鐘であるという事にならないか。即ち何かの理由で琵琶湖の湖底深くに沈められていた梵鐘が水中で発見されて、それが人々によつて引き揚げられ、三井寺に寄進されたものと思われる。梵鐘には無数の傷痕が付いているそうだが、恐らくはそれは湖中に沈む時、或は湖中から引き揚げられた時に、付けられたと思われるが、三井寺に伝えられている伝説では、依藤太秀郷が三井寺に寄進した後に、三井寺と比叡山延暦寺との争いで鐘は弁慶に奪われて比叡山に引き吊り上げられ、弁慶が撞いてみると、鐘は「イノー、イノー(関西弁で帰りたい、帰りたい)」と響いたので、弁慶は「そんなに三井寺に帰りたいのか」と怒つて鐘を谷底に投げ捨て、その時に傷付けられたとい<sup>資料3</sup>う。

万葉集巻第七に詠まれている金の岬は、原文では「金之三埼」と表記され、現在の地名表記では鐘の文字が使用さ<sup>かねの</sup>

れ鐘ノ崎となっている。

また志賀は福岡市東区志賀島、博多湾北部に位置し、玄界灘に臨み、周囲一二kmの小島である。逸文筑前国風土記には資珂嶋と表記して、「筑前国の風土記に曰ふ」と前書きして、志賀島について次の如く説明している。

昔時氣長足姫（神功皇后）の尊、新羅に幸しし時、御船夜時にてこの嶋に來り泊りけり。陪從に名を大浜と小浜といふ者あり。便ち小浜に勅してこの嶋に火を覚めに遣はしたまふに、得て早く來つ。大浜問ひて云はく「近くに家ありや」といふ。小浜答へて云はく「この嶋と打昇の浜とは近く相ひ連接きて、殆に同じき地と謂ふべし」といふ。因りて近の嶋と曰ふ。今、訛りて資珂の嶋と謂ふ。

（昔、氣長足姫の尊が新羅に行幸された時、御船を夜にこの島に來て停泊した。付き従う者に、その名を大浜と小浜という二人がいた。そこで小浜に命じられて、この島へ種火を探しに派遣されたところ、素早く入手して帰って來た。大浜が「近くに家があるのか」と尋ねた。小浜は「この島と打昇の浜とは続いていて、同じ地域だと言つてもよい」と答えた。こういう次第で近の嶋と名付けた。今、発音が変化して資珂の嶋と言うのである。）  
一種の地名起源説話であるが、島は打昇の浜と地続きになつていて、打昇の浜は現在海の中道の浜と言われている。

所の古称であり、干潮時には地続きになり、徒歩で往来出来る事から、島が大変近くなつて、従つて近の嶋、そして表現が資珂の嶋、現在の志賀島になつたのである。氣長足姫の尊の船団が寄港するなど、博多湾は大型船団が停泊する事が可能な事が、この風土記の記事から窺える。そして志賀島は、都へ向かう船舶が必ず停泊する島でもあつた。万葉集卷第七1230番歌によれば、あの恐ろしい金の岬を無事通過する為には必ず志賀島に立ち寄つて、島の神である志賀海神社（祭神底津少童命・中津少童命・表津少童命のワタツミ三神）に祈りを捧げて、神の加護を受けなければならなかつた。万葉集卷第七1230番歌に続く1231・1232番歌は、230番歌と三首一組の歌群である。

⑦ 1231 天霧らひ日方吹くらし水茎の岡の水門に波立ち渡る

（空は雲がかかつたように曇つていて、日方即ち太陽のある方向からの風が海に向かつているらしい。

岡の港には波が一面に立つている。）

⑦ 1232 大きな海は波は恐し然れども神を祈りて船出せばいか

に（大きな海原に立つ波は恐ろしい。けれども忌み慎んで海の神を祀つて船出をしたらどうだろうか、無事だろうか。）

⑦ 1230・1231・1232の三首は、1230番歌は恐ろしい神靈の宿る金の岬を無事通り過ぎて、志賀海神社の皇神の事を私達は忘れない。1231番歌は天候を窺いつつ土地誉めも行って、航海



志賀島全図

の無事を祈る。そして1232番歌は志賀海神社の皇神に祈りを捧げて、無事船出をする。

金の岬は志賀島から都へ向かう時には、どうしても通過しなければならぬ航路があつて、それは陸地(金の岬)と島(地の島)との間にあつて、

そこはまた女界灘と響灘との接点であり、そこを無事通過する為には志賀海神社の加護が必要であり、その加護を受けて無事通過した時の感謝の気持ちと喜びとが、この三首に詠まれている。

志賀島は博多湾の外側、女界灘に面した握り拳にぎりこぶしのような島である。万葉集にはこの志賀島に関係する作品が、筑前国志賀の白水郎歌十首を除いて、十三首収録されている。⑫3170「志賀の海人の釣りし灯ともせるいざり火のほかに妹を見むよしもがも」(志賀島の漁夫達が夜釣りをして点している漁火のほのかであるように、ほのかにでも愛するあななを見る手立てがあつてほしい。)の作品の如く、漁業を生業とする人々が住む長閑な島である。この志賀島の東側、女界灘に面した所に志賀の皇神の志賀海神社があり、博多

湾に停泊して都へ向かう船舶は、地中海の難所である金の岬を無事通過する事が出来る事を願つて、この神社に祈念して出港する。

志賀島は古くから海人部族の首長である阿曇あづみ氏の支配する所であり、島からは銅剣の鑄型が出土したり、古墳も見されたりして、大きな勢力を誇っていたらしい。全国各地に見られる志賀の地名は、その阿曇氏の影響を受けた土地であると言われている。一例を取り上げると、名古屋市北区に志賀町・元志賀町・西志賀町の町名がある。近くの志賀公園遺跡から、木簡(弥斗と記入)・墨書須恵器(山田と記入)・墨書灰釉陶器(市と記入)等が出土した。木簡は七・八世紀頃、墨書須恵器は八・九世紀頃、墨書灰釉陶器は九世紀頃のものと言われている資料4。



国宝 漢委奴国印

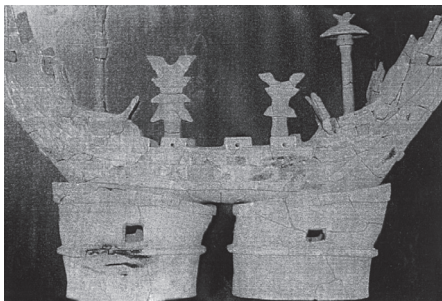
志賀島はまた大陸文化移入の拠点でもあつた。その志賀島から、天明四年(1784)金印漢委奴国王資料5が、島の東南部農地から出土した。百姓甚兵衛によつて発掘されたのであるが、この印面の一辺の長さは二・三四七cmで、漢時代のほぼ一寸に相当する資料5。この金印には偽物説も登場したらしいが、中国の

歴史書である五漢書に、「建武中元二年（AD 57）倭の奴国奉貢朝賀す。……光武（後漢皇帝光武帝）賜うに印綬を以てす。」とあって、金印授与は事実であるとされ、現在は金印は福岡市立博物館に保管されている。福岡市はこの金印が志賀島から出土した事によって、奴国は福岡平野にあったとしているが、この重要な金印が福岡本土からではなく、何故に玄界灘に面している志賀島の農地から出土したのであるか。出土場所を正確に表記すれば、筑前国那珂郡志賀島叶ノ崎で、島の東南岸に位置する。

後漢書に記録されている奴国は、大和平野にあって福岡平野ではない。金印はその奴国に贈られる途中に、船が玄界灘の荒波を受けて遭難沈没し、他の積み荷と共に志賀島に打ち揚げられたのではなからうか。この金印は倭国ばかりではなく、金印に相当するものは他国にも授与されており、しかもそれは永久授与ではなく、当時の規則によれば授与された側の支配者が死去すると、金印は後漢に返還しなければならなかったらしい。従ってもし倭国に直接授与されたものならば、その規則に従って、支配者の死去後金印は後漢に返還されているはずである。それに印綬という言葉には、印綬を帯びるは官職に就くの意味があつて、同時に印綬を解くには官職を離れる、辞任するの意味があるから、金印印綬即ち金印印授は、永久的授与ではなかつたのである。更にこの意味から推測すると、金印印綬は後漢

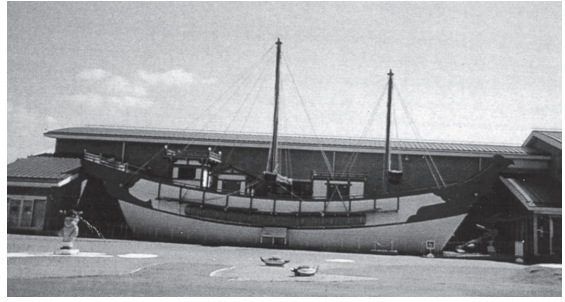
から職務的支配を受けていた事になる。また阿曇氏は原始大和國家成立に大変重要な役割を果たしたとも言われ、その巨大勢力から金印は或は阿曇氏に贈られたとも考えられる。

平成十三年（2001）三重県松阪市宝塚一号墳から船型埴輪が出土した<sup>資料6</sup>。全長一四〇cm、高さ九〇cmで、船上には太刀・威杖・蓋等<sup>カサガサ</sup>立ち飾りが施されている。船端はかなり装飾的で、精巧に製作された埴輪である。この船型埴輪は約一五五〇年ぐらい以前のものであるとされ、古墳時代中期の埴輪である。その古墳時代の理想的船舶模型とも考えられるが、後の遣唐使船と比較して大差はなく、あ



宝塚一号墳出土船型埴輪

る程度当時のままの船舶模型であつたのではなからうか。遣唐使船については現存する資料が少なく、比較は大変難しいのであるが、鑑真和上東征絵伝によつて遣唐使船が復元され、その復元船の一隻が、奈良市平城宮址に展示されている。その復元船によると、船体の全長は三〇m、全幅九・



遣唐使船復元船

は行われており、航海に使用されていたものと思われる。従って松阪市宝塚一号墳出土の船型埴輪は、理想的船舶模型ではなくて、当時実際に使用されていた船舶の模型であろう。だが鑑真和上は日本渡航には何度も失敗を繰り返しているし、安倍仲磨が遂に故国に帰る事が出来なかった理由は、気象学や航海術の未発達・未熟が最大の原因だったのではなからうか。

万葉集中最大の悲劇を詠んだ作品として、巻第十六に次

六m、排水量三〇〇トン、

積載荷重一五〇トン、一

隻乗員数一五〇名の大型

船である。遣唐使船は四隻六〇〇名が一船団である

とされているが、逸文

筑前国風土記神功皇后新

羅行幸記事が史実である

とするならば、玄界灘・

対馬海峡航行は可能な船舶

の大きさである。神功

皇后新羅行幸が伝説であ

って史実ではないとしても、日本はかなり古い

時代から大型船舶の建造

の歌群がある。

筑前国志賀の白水郎が歌十首

大君の遣はさなくに賢しらに行きし荒雄ら沖に袖振

る(大君の仰せでもないのに、わざわざ志願して行った荒雄は、沖で袖を振っている。)

荒雄らを来むか来じかと飯盛りて門に出で立ち待

ど来まさず(荒雄は帰ってくるか、もう帰ってこないのだからかと思いつつも、飯を盛って陰膳を据えて、門に立っているのに荒雄は帰って来ない。)

志賀の山いたくな伐りそ荒雄らがよすかの山と見つ

つ偲はむ(志賀の山をひどく伐らないでおくれ。荒雄の思い出の山だと見て偲ぼう。)

荒雄らが行きにし日より志賀の海人の大浦田沼はさ

ぶしくもあるか(荒雄が出掛けた日から、志賀の海人がいた大浦田沼は見るに寂しい。)

官こそ差しても遣らめ賢しらに行きし荒雄ら波に袖

振る(役所が任命したのなら兎も角、自分で志願して出て行った荒雄は、波間で袖を振っている。)

荒雄らは妻子が産業をは思はずる年の八年を待てど

来まさず(荒雄は妻子の暮らしを思わずに、長い歲月を待っていても帰って来ない。)

沖つ鳥鴨といふ船の帰り来ば也良の防人早く告げこ

そ(鴨という名の船が帰って来たら也良の防人達よ、

⑬ 3866

⑭ 3865

⑮ 3864

⑯ 3863

⑰ 3862

⑱ 3861

⑲ 3860

すぐ知らせておくれ。)

⑬ 3867 沖つ鳥鴨といふ船は也良の崎廻みて漕ぎ来と聞こえ  
来ぬかも(鴨という名の船が也良の崎を回つて来た  
と誰か知らせに来てくれないかな。)

⑭ 3868 沖行くや赤ら小舟につと遣らばけだし人見て解き  
開け見むかも(沖を行く赤い小舟に物を託けたら、  
ひよつとして人が開けて見はしないだろうか。)

⑮ 3869 大船に小舟引き添へ潜くとも志賀の荒雄に潜き逢は  
ぬやも(大船に小舟を添えて潜水させても、志賀の  
荒雄を海底で見つけられようか。)

右、神龜年中に大宰府筑前国宗像郡の百姓宗形部津  
麻呂を差して、対馬送糧の船の舵師に宛つ。ここに津  
麻呂滓屋郡志賀村の白水郎荒雄が許に詣り語りて曰く、  
「僕小事有り、若疑許さじか」といふ。荒雄答へて曰く、  
「走郡を異にすれども、船を同じくすること日久し。志  
は兄弟より篤く、殉死することありとも、豈復辞びめや」といふ。津麻呂曰く、「府の官、僕を差して対馬送糧の船の舵師に宛てたれど、容喙衰老し、海路に堪へず。故に來り祇候す、願はくは相替らむことを垂れよ」といふ。ここに荒雄許諾し、遂にその事に従ふ。肥前国の松浦県美祢良久の崎より船を發だし、ただに対馬をさして海を渡る。登時忽に天暗冥く、暴風は雨を交じへ、竟に順風なく、海中に沈み没りぬ。これによりて、妻子ども憤慕

に勝へずして、この歌を裁作れり。或は云はく、筑前国  
守山上憶良臣、妻子が傷に悲感し、志を述べてこの歌を  
作る、といふ。(右は神龜年間724〜729に、大宰府が筑前  
国宗像郡の人宗形部津麻呂という者を遣わして、対馬に  
食糧を送る船頭役に任命した。ところが津麻呂が粕谷郡  
志賀村の白水郎荒雄の許に行つて言うには、「僕はちよつ  
としたお願いがあるのだが聞いてもらえまいか」と。荒  
雄が答えて言うには、「僕と君とは郡は別だが、同じ船  
で航海した事は久しい。情の上では兄弟よりも篤く、仮  
に君に殉死してくれと言われても、なんで断つたりなど  
しようか」と。津麻呂が言うには「大宰府のお役人が  
僕を対馬に食糧を送る船頭に任じたが、年老いて海路に  
耐えられそうにない。それでわざわざやつて来て頼むの  
だ。濟まないが代わつてくれないか」と。そこで荒雄は  
承知して、ついにその仕事に就いた。肥前国松浦県美祢  
良久の崎から船出して、真直ぐに對馬に向けて海を渡つ  
て行つた。するとその時忽ち空はかき曇り、暴風は雨さ  
え伴い、とうとう順風を得ないまま、船は海中に沈没し  
た。そこで妻子らは子牛が母牛を慕うような思いに耐え  
きれず、この歌を詠んだそうである。あるいは筑前国守  
山上憶良が、妻子の悲しみに同情し、思う所を述べてこ  
の歌を作つたとも言う。)

歌群の内容はこのように左注に詳しく説明されている

が、筑前国志賀島の白水郎荒雄が、知人の宗像郡の百姓宗形部津麻呂の依頼を受けて、大宰府の命令でもないのに、対馬国への食糧輸送船の舵師を引き受けるが、途中で船は遭難して帰って来られなくなり、残された家族の歎きを、筑前国守山上憶良が家族に代わって詠むという歌群である。山上憶良はこの種の作品、つまり他人の悲しみをその人間に代わって詠む事を得意とし、山上憶良の最も特徴とする歌群である。山上憶良の同種類の作品としては、日本挽歌(⑤794~799)、熊凝(くまこり)の為にその志を述ぶる歌(⑤886~891)、貧窮問答歌(⑤892・893)等があつて、それらの歌群は山上憶良の作品を特色づけている。

志賀島は長閑な島である。男は魚を釣ったり、女は海中に潜って獲物を採ったりする作業は、少なくとも都人には長閑な情景だと見てとれたようである。だから釣る・塩焼く・漁火等の表現が、恋・辛(かた)・仄(ほ)か等の表現を引き出す為の序詞として、万葉集には詠まれたようである。その事例を挙げてみる。

①12622 志賀の海人の塩焼き衣なれぬれど恋といふものは忘れかねつも(志賀島の海人の塩焼き衣のように馴染んだ仲だが恋というものは一向に忘れられない。)

①12742 志賀の海人の火気焼き立てて焼く塩の辛き恋をも我はするかも(志賀島の海人が煙を上げて焼く塩のように辛い恋さえ私はする事よ。)

①23170

志賀の海人の釣し灯せるいざり火のほのかに妹を見むよしもがも(志賀島の海人が釣をして灯している漁火のように仄かでもあの娘を見る手だてがないものか。)

①2622 番歌は塩焼き衣を着馴れる意で詠まれているが、塩の持つ辛(かた)さから恋の辛(かた)さ・辛(かた)さと関係づけて詠まれているか。

①2742 番歌は2622番歌と同様、塩の持つ辛(かた)さを引き合いに出して詠まれているが、その塩と同様、恋がどんなに辛(かた)くても辛(かた)くても、それを乗り越えて恋し続けるという、作者の意気が読み込まれている。

そして①23170番歌は、遙か海上彼方に灯されている漁火のように、はつきりしない微かな光の如く僅かな手だてでもいいから、その手だてでもって恋人に逢いたいと願う気持ちが詠み込まれている。

このように都人は恋の表現の手段として、志賀島の海人達の生業手段を用いて、しかも長閑な気分でもって万葉集に詠み込んでいるが、だが果たして都人が抱いているような長閑な生活を、志賀島の海人達は送っていたであろうか。

万葉集巻第三に、「石川少郎が歌一首」の題詞を持つ278番歌がある。この作品には志賀島の海人(女)の、厳しい生活ぶりが詠み込まれている。

③278 志賀の海人は海布刈り塩焼き暇(じま)なみくしげの小櫛取



りも見なくに（志賀の海人は海藻を刈ったり、塩を焼いたりして暇がないので、髪を梳る櫛を手にとつても見ない事だ。）

作者の石川少郎（石川朝臣君子）は、神龜元年（724）から神龜二年（725）にかけて、太宰少弐として九州に滞在しており、この歌はその時の作品であろう。実際に志賀島の海人達の生活窮状ぶりを目の当たりにして詠まれたのである。その点が筑前国守であった山上憶良と類似している。三代実録貞観十八年（876）三月九日の条には、対馬送粮船は五・六回出航のうち三・四回は遭難して、犠牲者も多かったと記している。志賀島の白水郎荒雄が、このような危険を冒してまでも、敢えて送粮船の舵師になった背景には、厳しい生活の困窮があったのではなからうか。更に社会制度の整っていなかった上代においては、収入源を断たれた遭難事件後に残された家族達の生活の悲惨さは言うに及ばず、特に筑前国志賀の白水郎歌十首の⑬番歌に、最もよく表われている。志賀島は現代でも田畑に恵まらず、島民の生業は海一筋に縛られている。

志賀島の海人達の生活窮状ぶりを象徴するかのよう、万葉集中最大の哀しい事故を詠んだ筑前国志賀の白水郎歌十首、歌群の内容については⑬番歌の左注に詳細に述べられているが、今少し各首の内容を観察してみる。

3860 太宰府の命令でもないのに、対馬送粮船の舵師に

なつて遭難した荒雄の行爲を、半ば非難している。

3861 荒雄は遭難死していると思うものの、仄かな希望を抱いて、陰膳を据えたりして、荒雄の帰りを待つてい

る。

3863 荒雄のいない志賀島と、残された妻子の生活の厳しさ。社会制度の整っていない上代において、収入源を断たれた残された家族の悲惨さはいかほどか。生活不安を詠む。

3866 家族の悲痛な願い。年の長い歳月を表わす表現であるが、何年経つても戻つて来ない荒雄を諦めきれず、彼が乗船したと思われる鴨という名の送粮船が、也良の崎に漂着したら知らせておくれと、駐屯している防人達に依頼する。

3868 初句「沖つ鳥」は鳥にかかる枕詞。船名には鳥の名前が多かった。荒雄が乗船した送粮船は、沈没して幽霊船になった。

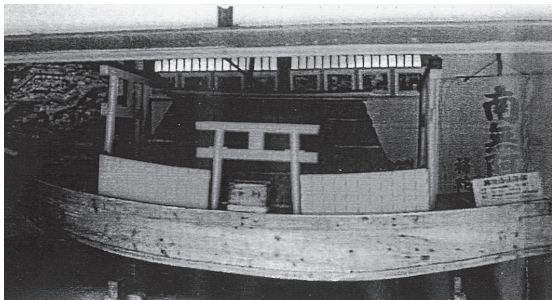
3868 漂流船（幽霊船）に荒雄への苞を託す。海底に沈んだであろう荒雄の遺体に会いたい。絶望と諦め。

⑬番歌「沖行くや赤ら小舟につと遣らばけだし人見て解き開け見むかも」の「赤ら小舟」には、どういう意味があるのだろうか。多くの注釈書には「船腹に紅殻（赤色顔料）を塗った船」と解釈してあるが、赤（朱）色を塗った船の事例は「赤のそほ船」(③270)や、「さ丹塗りの小船」(⑬

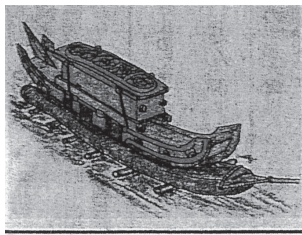
3299)」等の事例があり、赤(朱)色塗料着色理由は、船体保護の為とか、魔除けの為とか、また赤(朱)色塗装船は官船である事を示す為という説もある。鴨という名の船が荒雄の乗船した船であり、対馬への送粮船であるとしたら、その船は官船であり(岩波書店旧日本古典文学大系万葉集は「大宰府所屬の船か」と説明している)、赤(朱)色塗装されていた事になる。事実万葉集卷第三「高市連黒人が羈旅歌八首」の題詞を持つ270番歌「旅にしてもの恋しきに山下の赤のそほ船沖に漕ぐ見ゆ」(旅先にあつて、もの恋しく思っている時に、今しがた山の下にいた朱塗りの都通いの船が、もう沖の方で漕いでいるのが見える)は、都通いの官船であり、作者高市連黒人は行幸に供奉し、旅行先で都通いの赤色塗装船を見て、都を恋しく思っている。他の注釈書においても「赤色塗装は官船の目印とした」(小学館旧日本古典文学全集万葉集)、「政府の船は赤く塗っていた」(万葉集全註釈)等、赤(朱)色塗装官船説が多い。しかし鑑真和上東征絵伝を手本にして復元したとされる奈良市平城京址展示遣唐使船は、部分的には赤色塗装が用いられているものの、官船であるにもかかわらず、船腹をはじめ船体の大部分は、白色塗装が施されている。

ところで三重県松阪市宝塚一号墳から出土した船型埴輪(松阪市文化財センター展示)の船腹には、赤色塗料使用の痕跡が見られ、和歌山県東牟婁郡那智勝浦町補陀洛山寺

に復元されている補陀落渡海船(観音菩薩が住んでいると  
言われている海上の浄土補陀落を目指して、多くの僧侶が  
乗船渡海し往生を遂げた。その為の渡海船)にも、船体の  
半分に赤色塗料が使用されている。また平成十八年奈良県  
北葛城郡広陵町巢山古墳(四世紀・五世紀頃古墳)から、  
舟型木製品が出土した。長さ約三・七m、高さ約四五cmの  
葬送儀式に使用されたと見られる葬送舟で、装飾には赤色  
塗料が使用されている。(朝日新聞記事)これらの船舶等



補陀落渡海船復元船



舟形木製品

は官船ではない。舟型木製品については、中国の史書隋書倭国伝（七世紀）に、「遺体を船に置き、陸地で曳いた」と記されている事から、木棺をこの木製品に載せ、墳墓まで運び、埋葬したらしい。この木製品にも赤色塗装が施されている事から、赤色塗装は魔除けの装飾であつたと思われる。

赤色塗装の船は、冥界関係の怕ろしき船でもあつたのはなからうか。万葉集卷第十六<sup>388</sup>番歌「沖つ国うしはく君が塗り屋形舟塗りの屋形神が門渡る」（沖の国を治める冥王の屋形船、赤い色に塗つた屋形船が、神霊の恐ろしい海峡を渡つて行く）がある。「怕ろしき物の歌三首」の題詞を持つ歌群の二首目である。沖つ国とは、海の彼方にあると信じられている国、死者の靈魂の住む冥界。うしはく君とは、神がある地域を占有支配する冥界の王の事で、その地域とは死者の世界の事。赤色塗料を用いた船は、その冥界に渡船する船か、冥界関係の船とされている。土屋文明万葉集私注では、この<sup>388</sup>番歌の舟塗り屋形は、上代の葬儀は水葬で、海岸において死体を黄色（丹色・赤色）に塗つた屋形船の形をしたものに入れ、それを海に流す習慣があつたと説明している。そうすると<sup>388</sup>番歌の「沖行くや赤ら小舟」は、荒雄の家族が水葬用の小舟を見付けて、その舟に荒雄への苞を託すという事になる。その事は、荒雄はもう遭難死していると、家族は受け止めている事になる。

オキを表記する文字には沖と奥があり、沖を用いた場合は海・湖・沼・池等陸地から遠く離れた所、奥を用いた場合は最も深く遠くて人の行けない所、人の行かない所を意味していないだろうか。<sup>386</sup>番歌の場合、原文には奥の文字が使用されているので、荒雄は赤ら小舟に載せられて、奥即ち冥界に旅立つて行つたのではなからうか。更に<sup>386</sup>番歌には「飯盛りて門に出で立ち」とあり、これは「陰膳を据えて門に出て」と解釈するが、門とは門の内は妻子のいる現実の世界、門の外は荒雄のいる精霊の世界、即ち冥界の事であつて、門に立つという事は、荒雄は異次元精霊の世界にいて、「門に出で立ち」は異次元精霊の世界にいる荒雄を迎え入れる事になるのである。

対馬送粮は、筑前・筑後・肥前・肥後・豊前・豊後等の国々は、毎年二千石（36万<sup>石</sup>）の米を対馬に送り、島の役人及び防人の食糧に充てた。その対馬送粮船の実情が、三代実録貞観十八年（876）の条に、詳しく記録されている。それによると一隻の船員数は一五六人、対馬に無事到着する事は極めて稀で、漂流・沈没・溺死後を断たずとあち、非常に危険な航海であつた。航路は肥前国松浦県美祿良久の崎（五島列島南端福江島、遣唐使出航要地）を早朝に出航し、夕刻壱岐島到着。翌朝壱岐島出航、夕刻対馬到着の方法を採っていたらしい。対馬送粮船乗船の船員数が一五六人ならば、船舶の大きさは遣唐使船に相当し、決し

て小さな船舶ではないが、当時の気象学の未発達、海洋学・航海術の未熟さから、船舶遭難が後を断たなかったのである。

筑前国志賀島の白水郎荒雄は実在の人物名ではなく、無謀な意味を含めた志賀島の海人の実情を表わす、架空の人物名であると言われている。三代実録が実情を記録している如く、頻繁に起こる海難事故を訴える意味も含めて、そしてこの海難事故は豊かでない志賀島の海人達が避けられない宿命的な事故で、苦しみを訴えた歌群である。白水郎荒雄は、仮令対馬送根が大宰府の義務的任命でなくても避けられない志賀島の海人達の悲しみ・苦しみを訴えた歌群の登場者である。

白水郎はアマと訓する。倭名類聚鈔に記録されている「弁色立成云白水郎和名阿万」によって訓ずる。アマとは古くから日本各地の海岸にいた部族の名称で、海人・海士・海部等と表記する。大化以前から阿曇氏の支配を受けて魚介類を採ったり、海藻を刈ったり、塩を焼いたりする事を生業としていた。倭名類聚鈔卷第六国郡部第十一によると尾張国・隱岐国・紀伊国・豊後国に海部郡があり、更に郷名として、伊勢国・尾張国・上総国・隱岐国・丹後国・豊後国に海部があり、阿波国は那賀郡に海部があるが、この郷名はカイフと訓ませており、遠江国は敷知郡に海間と表記した郷名があるが、これはアマと訓むべきであろう。そし

て阿曇氏が最も広く支配していた筑前国は怡土郡・那珂郡・宗像郡にそれぞれ一箇所ずつ郷名に海部があり、この海部の表記は漁業に関係する地域の地名であるから、海岸または海岸に近い地域に表記されている地名であるが、海岸から最も離れている信濃国小縣郡に海部の郷名があつて、小縣郡は諏訪湖に近い関係から、諏訪湖の漁業に関係して名付けられたのであろうか。この倭名類聚鈔に記録されている地名は殆どが消滅してしまっているが、それでも愛知県海部郡・島根県隱岐郡海士町・大分県北海部郡・南海部郡に、現代でもその地名を残している。

海部の郡名・郷名は、その表記されている土地に海人族の居住地があつた事を示している。アマは現在では海女と表記し、その潜水作業は女性の専業になっているが、男性のみがその作業に携わっている地域がある。愛媛県佐田岬半島地域で、その地域ではアマは海士と表記し、潜水作業は男性の専業になっている。その理由は、この佐田岬半島の海域は非常に波が荒く、女性にとって危険だからだという事である。

海人族は魚介類の捕獲、海藻類採集以外に、既に述べた如く潜水作業も行ってきた。その特異性から、中央官吏の目には大変珍しいものとされてきた。アマは古くから海人・海士以外に、白水郎とも表記されており、その表記例は万葉集には① 23・③ 252・⑥ 999・⑦ 1167・1204・1245・1246・1253・

1254 左注・1318・1322・⑪ 2622・2743・2798・⑫ 3170・⑬ 3225・⑭ 3860 題詞・3869 左注・3876 題詞・3877 題詞の二十事例がある。

アマを白水郎と表記する事については、諸注釈書等には、白水郎は元々中国揚子江（長江）河口付近に住む漁業を生業とする住民の男子の名称で、この名称が日本に伝えられて、漁業関係者の名称表記に使用されるようになったと説明されている。言わば現代語の外來語・外国語使用感覚で用いられ、万葉集にその使用事例が多く見られるという事は、万葉人はエリート意識で、この白水郎を用いたのかもしれない。勿論万葉集以外にも白水郎の表記例は見られて、豊後国風土記海部郡の紹介箇所、「この郡の百姓は並海辺の白水郎なり。」と記されている。

万葉集の注釈書・訳文等の表記には、白水郎は海人・海士等日本古来の表記に戻されて解釈されているが、何故か⑬ 3860 題詞・3869 左注・3876 題詞・3877 題詞は、訳文にも注釈書文章にも原文のままの白水郎で表記され解釈されて、また豊後風土記海部郡の紹介箇所の訳文も白水郎で表記されていて、日本古来の表記に解釈されていない。その理由は一体何であろう。

後漢の光武帝からAD57年頃授与された金印の授与者は、その出土場所から推測して、志賀島の阿曇氏であると考えられなくもないが、その阿曇氏が支配する海人部族に対して、万葉人はどのような身分的感覚を抱いていたであ

ろうか。次の事例によって判断すれば、万葉人は海人部族に対して、賤民的感覚を抱いていたのではなからうか。

万葉集巻第五 松浦川に遊ぶ序

…僕問ひて曰く、「誰が郷誰が家の児らそ、けだし神仙ならむか」といふ。娘等皆咲み答へて曰く。「児等は漁夫の舎の児、草の庵の微しき者なり。郷も無く家もなし、…」（私は思わず声をかけた。「あなた方は何処の里のどなたの家の娘さんですか。もしや仙女ではありませんか。」と。娘達が皆につこり笑って答えた。「私達は漁師の子で、あばら家の見るかげもない家に住む者です。里もなければ家もありません。」）

⑤ 853 あさりする漁夫の子どもと人は言へど見るに知らえぬうまひとの子と（魚を採る漁師の子どもだとあなたはおっしゃいますが、一目でわかります。高貴な御身分の娘だと。）

万葉集巻第五「沈阿自哀文」の漁労関係者の叙述

…昼夜河海に釣魚する者すらに、尚し慶福ありて俗を經る事を全くす。（漁夫・潜女、各々勤むる所あり、男は手に竹竿を把りて、能く波浪の上に釣り、女は腰に鑿・籠を帯びて、潜きて深き潭の底に採る者を謂ふ）…（夜も昼も海や河で魚を釣ったり、網で捕えたりする者でさえ、結構幸せを受けて、十分身過ぎをしている。漁夫や海女は銘々職種に違いがある。男は手に竹竿を持って巧

みに波の上で釣をし、女は腰に鑿・籠をつけて、潜って深い淵の底で、獲物を採る。そんな連中を言うのである。)

万葉集巻第五松浦川に遊ぶ序及び853番歌は、大伴宿祢旅人の作だと言われており、遊仙窟(唐代の伝奇小説。主人公である作者が、黄河の源に使用した時、仙窟に迷い込み、二人の仙女の歓待を受け、詩文を贈答しつつ一夜の歓会をとげる。)を模倣して書かれたとされ、松浦川に魚を釣っている女子達に出会って、その美しさに心引かれて、仙女ではないかと問いかける内容であるが、女子達の回答「児等は漁夫の舎の児、草庵の微しき者なり。郷もなく家もなし。」に、万葉時代の海人部族の生活の様子を垣間見ることが出来、万葉人達は海人部族は賤しき身分の者であると思っていたのではなからうか。また同じ万葉集巻第五沈痾自哀文は山上憶良の作で、この文章中「漁夫・潜女各々勤むる所あり。男は手に竹竿を把りて、よく波浪の上に釣り、女は腰に鑿・籠を帯びて、深き潭の底に採る。」に、海人部族の作業の様子を知り、大伴宿祢旅人も山上憶良も、海人部族はこのような作業・生活をする者だと、彼等に対しての賤民意識が働いていたのではなからうか。こうした海人部族の生活の厳しさと貧しさは、「石川少郎が歌一首」の題詞を持つ万葉集巻第三278番歌の「志賀の海人は藻刈り塩焼き暇無み櫛笥の小櫛取りも見なくに」に、最もよく表わされている。

島の周囲一二km、南北四km、面積五・八七kmの小島である志賀島は、「筑前国志賀の白水郎が歌十首」の哀しい舞台となり、過酷な労働を強いられている海女達の厳しさを暴露する③278番歌の舞台であるが、一方では⑪2742番歌「志賀の海人の火気焼き立てて焼く塩の辛き恋をも我はするかも」の如くロマンを沸き立たせる島でもある。

・万葉集の書き下し文は新編日本古典文学全集による。ふりがなと口語訳は私に付す。

・風土記の書き下し文と口語訳は新編日本古典文学全集による。ふりがなは私に付す。

#### 参考資料及び参考文献

- 資料1 おくのはそ道を歩く 敦賀 金ヶ崎城址説明 角川書店
- 資料2 福田良輔編 九州の万葉 桜楓社
- 資料3 三井寺参拝栞 滋賀県大津市園城寺
- 資料4 文字のチカラ展資料集 名古屋市博物館
- 資料5 邪馬台国と大和王権展資料集 京都国立博物館
- 資料6 松阪宝塚一号墳調査概報 松阪市教育委員会

(つねまつただし)